

年次大会 発表要旨（令和二年十一月十三日）

（いたや・とうこ、

論理に着目した文章指導法とは―初級日本語学習者が書いた文章を例に―

板屋登子

日本語学習者が書く文章は、文法や語彙を多少直しても、すぐにわかりやすいまとまった文章にならないものが多くある。これは、文章のはじめと終わりの意味がつながらないなど、学習者が談話構成を意識せず思いつくままに書いてしまうことが原因だと思われる。このような文章を改善するためには、談話構成の指導が欠かせないが、本発表では論理に着目をして、談話構成指導を行う方法について考察した。

これまでの文章研究には、文章のまとまりを形作るものとして結束性と一貫性を分析したBeaugrande & Dressler (1981) などがある。本発表は、結束性と一貫性をつなぐものとして論理を位置付け、野矢 (2017)、石黒 (2008)、永野 (1986) をふまえ、学習者に「文と文の論理関係を考えさせる」「文章のいろいろな書き出しのみを示して、続きを書かせる」「文章のいろいろな結びのみを示して、その前の文章を書かせる」という論理を用いた3つの文章指導法を示した。

さらに、談話構成を意識させる指導実践例として、初級日本語学習者に4文からなる短い談話モデルを2つ以上提示し比較させることで、談話構成を意識させる指導ができた例を示した。

創価大学日本語・日本文化教育センター助教)

年次大会 発表要旨 (令和二年十一月十三日)

日本人の韓国語習得における統語レベルから機能レベルへの発達について

齊藤信浩

主題卓越型 (Topic Prominence: TP) の言語は、先行文脈の情報があれば、主語の項省略が可能である。TP言語である日本語と韓国語は、更に、目的語の項省略に加えて、助詞の省略も可能である。Hinds (1983)、Hwang (1983) の研究によれば、日本語も韓国語も、先行文脈の情報によつて、主語 (NP1) の項は、NP1-nom>NP1-top>NP1-φ>φのような機能的な省略があることが観察されている。また、目的語 (NP2) の項は、NP1よりも習得が困難であり、目的語の項自体や目的語をマークする助詞の脱落現象が観察されている (Otsu 1994、Cho et al 2002、斉藤 2006)。前者は機能的な「省略」の現象であり、後者は習得過程で生じる統語的な「脱落」の現象である。韓国語を学習する際に、このような複雑な省略がどのように習得されているのか、本研究では、韓国語を学習している日本語母語話者8名の被験者を対象に2ヶ月おきに3回にわたって縦断的に自由作文で韓国語の他動詞文を産出させ、調査を行った。その結果、NP1-top/nom+NP2-φの構造から、NP1-top/nom+NP2-accの完全文の段階を経て、φ+NP2-accの機能的な省略を行うようになることが観察された。これは、まず文を作るという統語的な習得段階があり、その段階では機能

的な操作はできないことを示している。そして、統語的な習得の後に、機能的な操作が可能になってくることを示しており、いかに類似した言語であっても、機能的なレベルの操作は先に統語的なレベルの習得が完了していない限り、引き起こされないことを観察した。

(さいとう・のぶひろ、九州大学留学生センター准教授)